重修真書太閤記

十一編 六

459
106

特13へ
門多聞
號 459
卷 106

消印 福沢

重修太閤記十一編巻之十六

山中合戰敗軍の事
并井伊直政先陣の爭ひの事

山中の城主々松田兵衛大夫康長形ゝ父ハ筑前守康定といふ田原藤太秀郷ゟ二十二代の孫ゟして山中三万二千貫文を領をといふ加勢ハ北條左衛門大夫氏勝間宮豊前守好高朝倉能登守政元形ゝ志ゝ所ゟ松田間宮ゟ〻やうち死したるゟ左衛門大夫氏勝ハ本丸より敵ゟむうひ法くして出追ひらひつ命をおしまゝ數刻のたゝかひゟ敵

同攻會印

とへきれと。も。一足もひくとおもく。たゞ一筋ゝ思ひ切て。かけいくゝやかけ入〳〵たりけるゝ。上方勢松田間宮ゝ打死せ〳〵よう。本城へ。切入んとしせしに。倉を破て財寶を分捕〳〵けふゝどゝ。左衛門大夫おくろ靜やゝ。本城へひきいれ。自害せんとおしけふ処へ。間宮能登守。木村三河守。堀口日向守をそ〳〵め。氏勝の弟北條新八郎。同新三郎。をせきこゝろ。軍のおらひ。勝負ハいくゝ〳〵あるへ〳〵。必定かひべきそのふも。あら〳〵。まゝ負ても始終負へきゝあらし。此城あなゝかく攻やふらはゝ。又運をひらくへき。時節おゝとも。いふへやら〳〵。一まの落させたまへやと。引立らるとて。せんゝ〳〵おくゝ。夜ゝ間を終て。城を出ゝ。とも。流石小田原へ。ゝんも面目おゝとやおもひゝん。一族郎従十八人。髻をきり。久野をめくり。甘縄の城へ。おもゝけり。この左衛門大夫といふハ。早雲寺入道の末子ふゝ。幼菴入道の弟おゝ。そ〳〵めハ。左馬頭氏時といひ〳〵おれハ。七十四五ふもおゝ。のへゝ。おゝはゝ。甘縄ふまもゝ。おくふゝ。せめゝ北國勢をふせきゝ。かゝぬ時ハ城をまくらゝ。討死と思ひ切て。居たまひける処へ。氏政父子より。栗田兵衛丞を使とゝて。山中ふての御そゝらき。全く金吾の未練ゝいゝ。いくさのおらひ。おゝ。落城をおとゝ。

恥辱と申へからん。さやく小田原へ御入ゆへと。度たび仰らるゝ。氏勝たゞ。この城を枕ふとのゝ。返事して。はらま小田原へ。參るへしといそれを。栗田小田原へ。そ〳〵さゝやへう。左衛門大夫殿い。御心やすうとおぼえい。おゝ〳〵御使まゐりて實否。うけたまゝり切。いよ〳〵御二心ふゆゝ。をぼれおゝから。御去ろ〳〵を。あげゝへくと申けふを。氏政聞たまひ。かの金吾い。一族の内乃長者ぬう。子息ゝ二人あり。當家滅亡の後。名字を殘さんと。おゝをぬる。へ〳〵。夫をおさけぬ〳〵。うち奉らんと。早雲寺どの〳〵御〳〵ろふ。かふへうらん。と。申されしゝい。是を

きく。その大將の御〳〵ろの廣さ。おさ〳〵のい。却てせ〳〵と感〳〵けり。去ろぬま。四月十六日の夜。竹浦口の皆川山城守廣照。百騎をかりを引率して。降人ふいでたり。關白殿下。大よよろこひたまひ。城を圍むく。いま〳〵日數ゝ經さはゝ。降參。そのそゞめ。よ〳〵て。山城守を懇ふ。うてふされけり

皆川正中録ふ。皆川山城守廣照ゑ。小田原竹鼻口ふあり。下野皆川ふい。關口但馬守。河津石見守。川田因幡守。植竹三河守。河野伊豆守。渡邊丹後守以下都合五千餘人ふて。たて籠るけふ。天正十八年四月四日上杉殘野の人々より使者を差こ〳〵

關白殿下の御諚なり。城をゆさぶらんと。あらそ
ひい。城代のそば。關白殿下の御諚とゝへい。早々
明退申へくゝへどゝ。城主山城守小田原よりまか
ゝあるゝ。我々い。山城守のさゝづをうけ申さん
して。此城御ゆさぶり申されを。小田原へ申たゝせ
去ゝ間。御猶豫くだはるゝへと。申去るとゝ。許容
おく。五日大柳口より。淺野の勢。小野寺口より。松
平修理の勢。ゝよせけるゝより。皆川方も出合
取々よく軍しけるどゝ。よせ手ゝ。目ゝおゝ大
軍なり。同八日終ゝ城代の侍一人ゝ。ゝのゝ。戦
死しゝ。應永元年より。百九十六年相續おゝひる

皆川落城ゝをゝひけゝ。同十六日。廣照駿府ゝ
はひく。降參ゝくゝけゝとゝ。別本家忠日記ゝ
四月八日皆川山城守廣照駿府ゝ。ゝひて。降をゝ
とゝゝる。皆川落城の日を誤ゝ
關白殿下ゝ。氏政身ちゝかゝ。一両人降人ゝ。ゝで
ゝ。落城の方便ゝ。甘縄ゝ。ゝたる北條
左衛門大夫ゝ。別心ゝ。ゝとゝ。おゝ。降參した
らんゝ。本領安堵相違ゝ。誰ゝ左衛
門大夫をゝたゝゝ。ゝゝ。仰られしゝ。
駿府の御下知ゝて。都筑弥左衛門尉。松下三郎左
衛門尉ゝ。孫ゝ。左衛門大夫ゝ。知人なり。申て見ゝへ

とて・両人を・左衛門大夫ゟ許よ・をきむかやそせ・られ・
關白殿下の・御こゝろのうちを・申ふくめ・左衛門大
夫・仰へさふらを・ゝ・何の恨もかを・氏政・氏直を見
ゝて・敵方一味さへきよ・あらんといひて・同心せ
ゝ・去ゝほゝ・松下ゝ一族あゝ・龍達和尚
といひしへ・左衛門大夫ゝ・墓所龍寶禪寺の住持よ
して・氏勝と・年來師資のちぎりあさからん・又駿府
より・本多忠勝・榊原康政・井伊直政御使として・参向
三度よをよ・是よ於て・氏勝御旨よ・ちゝかひ黒衣
ゝ・架裟かけ四月廿一日關白殿下へ出仕しけゝ・
とゝ・ゝとゝ本領安堵の御書をゝさんたゝこれを始

として・北條家譜代重恩の侍・志水上野守ゝ・出家入
道して・城をゝくゝ降参しけゝ・佐倉・土氣・東金・聽
南河越・下妻・いしゝゝ降参したりけり・ゝくよ・
駿府の御勢小田原へよをたまひけゝ・三枚橋の
城主あゝけゝる松平周防守康重・佐野口より宮城野
ゝのゝ・北條ゝ兵戎ゝ・首ハ十余級を得たり・
ゝくゝ於て・宮城野・湯本・竹ゝ浦をまもゝ兵士等
をへく・小田原よ・逃いる・これ北條家よむかひ・最初
の合戦ゝ

流布本松平周防守康重・先陣ゝて・小田原ゝむ
かふをゝて・井伊兵部少輔直政・いしゝて・御先

手ハ・なきれバ・しかるべし・何条その方ハ・おもはゞるへきと
いひし時・周防守あらへて・いや某へ先手を仰付
られしよ・あらん・某領地と・北条の領地と・堺入相
たるを以て・案内を仰付られしあらんと・答へける
ふよう・直政いろみも・御案内とあらハ・尤なり・何
さゝ・道筋の遠近よりして・山坂の難所さへて・御
差圖くゝ・ちがへしと・先陣ハ於ても・なきれバしよう・
ゐらふ・あるへしとも・覺えんと・いふ・周防守大ハ
怒り・此方ハて・禮義を厚くして・あゝふるまい・方外
ふる・ものゝ云やう・何とて・そのゐう乃為ハ・案内
者とおらんやと・いつゝ・まゝでハ事出來さへく見

えしゝ所ハ・この爭・御本陣ハ・聞えしハよう・早速両
人を・めさゝ・直政ハ・いやハ所・尤至極なり・これハ・
事多くして・御達しかされさふなへハ・尤様の事
ふも・及びしなり・周防守ハ領知小田原と相接し
たれハ・案内ハ・ゝゝ仰付られし処なり・直政ハ・い
ひも・先陣とも・ゝゝ・ふかけし処・強勇のいゝなり・
たゝ・ゝこの心を見からひ・へと・仰られしハ
よう・本多・榊原ハ・かへゝ・これ我悦ひをと・いふ・
一節あり・これ全く・筆者の心を以て設し論なり・
決して・いつそうあり
渡邊勘兵衛勇戰の事

弁山中木九合戦の事

渡邊勘兵衛正・今年二十八歳・膂力まさる・壮かる上武藝まさる世よ者なるされしかゝれ・山中の城の体候よりて・城責の次第をへく十分の勝利を得しと・まとよ弓矢の冥加といひつへし・さるや・又その勝利を得しと陰徳の報といふへき者・勘兵衛幼稚ふして・父母をうしふひ・まとよ身をそく所かゝりけふ・母方の叔父なるものに・頼りけかき僧よあて・伊豆國小土肥の清雲寺といふよ在よりを聞て・我れたゞよ・母うやさこなるとゝかくゝ行て計らぢやと・おもひたちて・十餘歳の時・そゝ〳〵と都より東海道をくぐりけるよ・元より貧しき身なり・たびのいて形どゝ・そゝ〳〵いから孫ハ・多くの日夜をかさ孫てやう〳〵よ・伊豆國よ下りつき・小土肥の里よ・いたり・清雲寺をたづ孫つゝよ・寺ハあるとゝ・頼うて下り〳〵僧ハあらゝ・さゝ〳〵この僧をかうを頼ゝ〳〵人うして・そゝ〳〵遠くきさ〳〵その浅・その行衛いうよ・かつ〳〵・知まゝしと・去きうよ・打歎けは・寺よあつゝふゝもの・哀やうよ〳〵〳〵これを尋ぬゝい・去年の冬・日金嶺ふく・山犬よいてあひ・命を殞せし僧のあつゝふを・何處の人とゝ去らされとゝ・非命よ死せしを・あゝるゝとして・其所の人々有へきやう

ふ・沙汰しのく・取収めて後は・清雲寺の客僧と・こそ
てそふ・その客僧こそ・御身の叔父ゑて・あうけらめ・
といへい・勘兵衛幼稚のあ〜ろは・左てい・吾叔父か
まゆる人ゑ・猛獣のためは・命をおとはしけるろ然
ふくゆ・その客僧乃・所持せしめのやあは・それを見
い・弥たしゃは・吾叔父からんと・知へきめのをと・云
のふを・きひて・さてゆゃしあき・小人かか・我々い・心
付さうけふはとく・その客僧の・日頃・ちこけろ・房は
いつて・見しふ・持佛持経い・そのまゝはして・在けは
人の影ゆ形し・あおふしき・同房二人と・見えけはは
犬はあひしゑ・たゞ一人さくゑ・我叔父たしゃは・犬

ふ誤たゑ〜とゆおゆそれをあか心そふしとけび
けふを寺の檀那の鈴木某そゆ幼稚ふしてそゆく
と叔父をたつ孫しこそ流さしよゆ悪人ゑはあふ
まゝき形う我それを助けてその拵くさそを見を
てんとおゆひ定めいろは小人頼のゝ人へこくは
あらけさたちは犬は身をあやまちしかそれゆ知
きややゆく便宜の去はゝまくこそふありて待たま
へ我へいやしき民かれと此處は久しきめはし
て山をゆ野をゆ大やゝひろくしめけゆへ川狩山
猟こそのまゝゑ仕たまへやといそれて勘兵衛
幼か心は世はたのそおき我をやくまていそはゝ

嬉しきよと身ましく思ひしかは鬼ゝ角ゝ
鈴木ゝかしのまくゝ此處ゝ足をとゞめ四五日を
をくしけふゝちまいしゝゝ處の案内を知り此ハ
桑の古枝を打きゝ弓をはくゝ芋をそきて弦と
かゝ竹をためく箭柄とかゝ鵄の尾をさして矢と
なゝ竹の根をけいて鏃として鬼や鹿を射て見
しまゝ出かゝのふゝ又貫きゝ弓矢のちゃらを手ま
出ゝ之枝を出よゝしてゝ山まへ入三日ゝ四日ゝ山ま
又山を獵くゝゝ十余日ふゝていづるをゝあゝせ
余日ふゝて出る日ゝあゝいゝゝ得るたびま清雲
寺まきくゝゝかの客僧の墓まそゝへくゝかくゝ

口説をきけゝこの獣御身の仇ゝさゝあらぬかハ
ちらされとかゝらゝ人を傷おゝ獣おゝよゝくゝ
くゝ射とめてひなゝとゝいひくゝそのまくゝ山まいゝ
まくゝ山犬をめとめけゝ鈴木ゝのちゝハ是をあゝ
幼稚まゝ似ゝくくゝ乃底のたけきを鎮西八郎どの
ハ見ゝせぬおかゝ形ゝ聞をよびはる弓取まかく
まて雄しき人ハまくゝ去ゝゝ猶いきけおゝ末
代不思議の勇士からんとき衣をたのうて育けま
るかゝ勘兵衛山まいゝて乙三十余日いでされハ如
何ゝゝ仕りん弓矢とくくゝ手きくくゝあゝとゝ又誤ち
のかゝらをやとゝ鈴木大まかおゝくて日毎まゝ人を

いろ〳〵して・山より谷をたつ孫〳〵よ・そろ〳〵して・そぶち乃山の・山懐よ・人を二人見いろ〳〵たつ・漸々ふしてちかげきはゝ〳〵・これを見れハ・一人ハ・まヤ人へくれあらぬ・勘兵衛ちう・二人ハ・去年犬ま誤ちせ〳〵ふらんと・思ひさ〳〵めし〳〵・清雲寺の客僧ま？いろ〳〵とたづぬるハ・去年の十一月・日金嶺をこゆるとき山犬の峯ゟ〳〵ま・いてあひ・同行の僧一人ハ・はいま誤ちして犬のためま・命を落〳〵たう・我ハ・仕合をまや〳〵へま立たゟ塔婆を以て・犬とたゝかひ〳〵ふと・犬ハ・山ふかく逃入たう・然ふて也・同朋の僧を傷たる・我一人・清雲寺へ也・ハ〳〵ろ〳〵・いろまも〳〵

て・犬をうちとり・それを面目まかへらんと・山中ふいろ〳〵・犬を探ひ〳〵かぐも・犬也心さう！我等をゑそい・逃ゝくれそ・影ゝゑせば・ゑろふふ是ある・小人ゝ・弓矢をとりて・山ふいり・犬をかふふゆきあふて・ことの本末たゞいま〳〵・処なりと・いそふ〳〵ふ・手ふ手をとりて・互ふよ〳〵とあきふたう・是より・叔父の僧と共ま清雲寺ふ・年月を送り十八歳の時・叔父の僧ゟうせ〳〵ろば・上方へところざし尾張國ふい〳〵頃・本願寺の下間某か旅宿へ強盗のい也〳〵を・捕え〳〵より・世ふ名を〳〵られたり〳〵とかや・かゝふ事ふより・伊豆の山中の案内よく知

たゞ此城ぜめ小たゞ一人の大功をば立つるか
ゑ勘兵衛この邊の山より山はゝ〳〵し谷より谷のり
まり〳〵ちらゐ処もかゝるかりしかば出丸の尾さきふ
かけ〳〵大鉄炮それハまゝまで幾十町この谷かけ
を廻りもけば何れの尾の上よいげるなりと小弥
て志りたる山こちらの間宮豊前守ゞきつていで
〳〵ぞあの山つゞきの谷合より横矢を射ることよ
かるらめ松田兵衛大夫ハあの丸よりいづるらめ
志らば とて小弓のもの彼処ふ鉄炮をふせかけ
やと むろ〳〵覽えし山猟ふせとをくゞり〳〵まろ
がまく それゞ今日の軍の手くゞりふと おりひも

よらぬ事共ぞう はもとも間宮一統五十一人 さい
かゝ 關東ゝ名を志られたる老兵かくふ ひもをひ〳〵
く 打もつよ〳〵 射れハ はらぬき 突ひもをぞうつひ 人並
ふをくれ 多く上方勢を亡ゐせ〳〵ぞう 中ゝひ 殊ゝ
見事ゝ見えゝ ふい 豊前守好高年はゝつて 七十三
鎧ゝぬいく 咽輪ゝ〳〵 薄紅梅の鉢巻〳〵 小手をひ
ち〳〵を 滋藤の弓ゝ 山鳥の矢たゞさゝ 馬かけをゝ
くい 下と射る 射をい 佐矢ハさらゝふ〳〵 二十余人
を射倒〳〵 扇ひらきて うちつうひ 老人のいらさふ
腕たくとい いひかゝら 此まゝゝ ひきやへをへき
ゝ 非を出かゝくい 敵ようちあゝく 死をやと 十文

字の鎗をとり上方勢のうちをまきたる真中へ北條
譜代の侍ま間宮とめのれと つきゃ〳〵として三四人
をはきたをし猶ゐもくむ処を誰ゐろありけん御
老体の御そくらき見事まれ御相手ゐれ たりれを
ゐとのち〳〵乃誓古のためといひかゐら鎗を合
せーゐ何とやーそん間宮ゐためま眉間をはかれ
く ひきゐりくゐ是をゐて間宮どの〳〵御手のうち
恐ゐいりくゐいぐ一鎗とやけむかひ七八十合も
突あへど はらま勝負も見えわるん間宮ハ鎗をあ
げをて〳〵太刀をぬいく切くゐゃ〳〵ま その武者の弓
手の腕をうち落ー そのま〳〵ちゐよう組ふせく首

をゃ〳〵んと せ〳〵処へ五六人落かさあり終ま間宮
我うちたりけり是をいくさのち〳〵めみく總軍一
度ま こゝ入ハ何れを何ゐと見えわのん

重修真書太閤記十一編巻之十七

山中落城の事
并韮山城寄手難戦の事

伊豆國賀茂郡山中城ハ三嶋より今道二里余上方より弓手よりおろうて、やまへたろ、此より小枯木・大枯木・石割坂・甲石坂・おとい入・嶮岨のうちををさて薔薇う原ふ・至ぢハ・伊豆相模の境あり我れよりこの越・赤石・むかゝ坂・いけもり・さくれ〳〵難処あり、こゝをはたやを〳〵越せしと、たのうゝ入・山中城たちまち・乗破らる、城主松田兵衛大夫康長ハ戦死し加

重修真書太閤記十一編巻之十六終

勢よをそ〳〵ま〳〵間宮豊前守好高一族ち〳〵め多く戰死〳〵たりけるよ北條一族の古老よりて當城よ籠ま〳〵左衛門大夫氏勝ハ父子主從うちの也夜よまきれ〳〵城をいで〳〵久能をめくりて甘縄よ落をけハ山中よ北ふまま〳〵そのとくハ栗本備前守片山大膳亮山岡左京亮たち三人と形りよりよりて栗本備前守頼茲ら〻土岐大膳亮定澄五代の孫形〳〵父ハ大膳亮光房といふ相模國畑よ〳〵一万石ちかりの地を領しのとハ此山中の加勢よりも多〳〵形ふりも味方打負城方の勇士大ヤ〳〵討死しのふを見て馬廻りよめ〳〵法ゆひ〳〵小童をよびて其方事ハ三歳より

手元よやしなひ〳〵そのの形とハこの方よりも古い法ゆ出ゆぬ形り備前守ら後世菩提をも訪人へ〳〵その方も古ふまきりふ如く叔母前ハ福嶋伊賀守どの〳〵室家ふり〻その子頼則ハ我弟とりのとども清水上野介ら〻ひらよ所望〳〵法ふまま〳〵清水ら子ら〳〵て今の太郎左衛門尉形り我嫡子備中守茲文ハ小田原よあれハ大殿若殿と死生を共よをべ〳〵ものうへよ當家の運命ちゆ去ぐまり〳〵滅亡遠ゆらに〻思ゑ形たり去らは如何よもして清水の子供三人あはうち いのとよて身を全くして栗本の苗字を法さへたく出ものよ形り此事を太郎左衛門尉よよ

く・はやくはその・その方ならでハ・有まじと・おもふ
かれへは・かくハ申ぞ・とく立退けよと・言葉せわしく
くいひさとせば・これハ口おしき仰かな・さきとう下臈
なり・討死の御供をなし得ましきものと・殿ニ思ハ
れし我身なれバ・口惜けれど・あなかしこ・いやしき・民の子なれ
ども・この十余年侍の家ニ養われたれバ・こゝろ
ざしハ・御子様がたニおとりまじ・御覧あれへ・卑しき
そのゝ・軍ハかくなれど・はたらきまけれど・いふようもや
く・二三十間へだてたる・上方勢のその中へ・太刀を
ぬいて・きりて入・おもひもよらぬ処なれバ・矢ふせ
ぎ三四人を・きりたおし・其の場を一足も去らずして

討とたるハ・けなげなり・又かたハらに・備前守ハ・只
惘然として・せんかたなき云つゞけよう・いつくら若き
ものを殺しける事のくやしさよ・はちハ・汝を・試さ
んとて・然いひしには・非ざりしを・早まりしことの
口惜さ・いでおくれしも・汝が跡追・死出三途をも・一
所ニ越んといひもあへぬに・四処藤の弓出つとつ・
はしためひきつめ・大その射ニ射たおしかハ・上方
勢誰とハ志らねど・十六七人ハ・射落さる・今ハ矢種も
つきたり・罪なくてニ・何がハ人を多く殺さんやと
いひつゝ・鞍の上ニて・手を合せ・西ニむかひて・念仏
し・其のうち・小田原のかたニ・うちむかひ・我等が防

く力のたらをして・敵を是まて引入たをい・城い・忽
ち・落されたり・はらゝ・我れ〳〵一人の罪ゑい
はさん・只今申りゆゑ腹きりはと・いふ聲とをもふ・
鎧ぬきをて・膚ぬ〳〵くのろけ・胸もとより・十文字ゑ
かきやぶり・太刀の柄を口ゑ銜え・馬より・真逆ゑ落
ひきはらぬゆをく・死くけり・敵これをして・栗本備
前守と・名乗〳〵と・覺えゝろ・いらせゆ・年も相應ゑ見
非ふぞ・自害の首とろ・せんか〳〵ゝ・首をはたをも
取さりけり

栗本系圖ゑ・土岐定明の末子・大膳亮定澄・近江國
栗本郷ゑ住けをい・栗本殿と・人へいふ・その弟清

圓坊といひ〳〵ゑ・東山どのゑ・法かえゝ・幸阿弥と
いひ〳〵同朋あり・定澄の子大膳大夫定國・その子
大膳大夫定房・その子大膳亮光房・關東ゑくゝゑ・
氏綱ゑ仕ふ・光房長子をふもち・賴茲・その子備中
守茲文・氏直と共ゑ・高野山ゑのぼり・氏直死して
のち牢人〳〵・その子源左衛門茲正のちゑ兵庫と
といふ・江戸ゑ奉仕ををいゝ
又一本ゑ北條左衛門大夫氏勝い・左京大夫氏繁
の子ゑりをいふ・氏繁ゑ・左衛門大夫綱成の子ゑ
ア・綱成實い・遠州高天神・天方両城主・福嶋上總介
正成の子あり・正成戰死の〳〵ち・こゝ〳〵こゝ〳〵

を氏康とうたて〳〵・天文十五年甘縄の城主とお〳〵ぬう・氏繁か・天正六年四十三歳ふて・早世〳〵ひしか・氏勝天正十五年廿八歳ふく・嫡孫承祖たま〳〵といへか・今年か三十一歳おふへ〳〵・降参の後・上總岩富ふて・一万石城賜そう〳〵といふ・慶長十六年五十二歳ふく・卒をとへう又氏勝山中を落て・箱根へや〳〵ま落ちぬよ・阿部河内守ふ見とゆめらと・はきをよう・道ふまよひ・韮山のや〳〵へ・落ちきゝ・やう〳〵ふ〳〵樵夫の道をたつ孫・久野をめくうて・甘縄の城へ入〳〵と記を

韮山の城か・北條美濃守氏規のたて籠ふのふを・北畠内大臣信雄公・の勢をたゝめ・蜂須賀阿波守家政福嶋左衛門大夫正則・長岡越中守忠興・蒲生飛騨守氏郷・森右近大夫忠政・中川藤兵衛秀政・戸田民部少輔以下一同ふをゝよせたゝ一息ふ乗いらんと攻立ふ抜〳〵韮山の城といふ〻伊勢新九郎早雲入道の居城ふて伊豆國田方郡ふあう小田原よう〻未申ふあゝう山中ようい南ふなゝう行程三里ふ遠〻蛭ゝ嶋口の門和田嶋口西乃門をハ十八町口といふゝよう北條まく十八町あふ抜へ形う西北を一色口といひ東北を小田原口といふ・よせて

十八町口より・きくめい・城中よりも・爰を先途と・防き
きけるよりて・血はかやれて・紅の浪をたぐよとち・
骸はたんて・刀枝の山をなせとも・勝負はらは・見え
ヨかは・追のかへしつ・せうあ人処は・城門をひらき
く・横田越中守・小笠原十郎左衛門尉等・福嶋正則ろ
陣へ・真一文字はいくくやはは・これは・むかしく正則
ろ幼稚はく人の子を殺し清洲を立のき小田原は
きくろ・福嶋左衛門大夫綱成ろもとは・草履取して・
居たるく時を・知りをばろ・はをろ横紙やぶりの
正則おれとも・その人の顔をみしは・そのむかしの主
とたのくく・左衛門大夫ろ傍輩ろ・正則馬上は立

あやう敵はおめひしくよりも小勢ろ吉村又右衛
門大橋茂右衛門福嶋石見蟹江才藏等はをうあそ
ぬりたく一揉はもみ落せと下知をれは承をうは
とく吉村又右衛門四尺あまりの太刀を真向はさ
しかざく面もふらは・たくか人たろ城兵吉村を見
く是はそむかしく左衛門大夫殿は草履とりく居た
るく市松男々郎等おとをりらをまくと攻かくはは
大橋茂右衛門福嶋石見蟹江才藏等吉村討をろ續
けくくと込合たはは城兵はくをせかさは是非は
うち取んとひしめきたろ吉村を討んと真先は進
くく城方の侍黒革おちくくの大荒目の鎧は同く毛

の五枚かゝと着て長穂の鎗をとり突てかゝるに
吉村は大太刀形ゝ一交もせにたき合うち合おし
けるゝ吉村左の脇ゝ薄手負ハゝの武者鎗かけを
て組んとかけるゝをいゝゝゝたりゝん
かさへゝる谷へ真逆まをちいゝたり吉村手負か
から谷ゝ出そゝゝゝ是をふまふさ十餘丈ゝあ
まりのきは續いて入へきゝあらにそのうちゝ城
中より横田越中守小笠原十郎左衛門尉二手ゝて
かゝるをよせてゝ也ゝへは烏帽子形のかゝとゝ赤
皮を以て大荒目ゝ出ゝたる鎧きて清水太郎左
衛門尉と名乗たきいけるその勢ゝまをゝけゝ

蒲生蜂須賀の勢たちまちゝ突くのさゝ寄手をこ
ゝる難義せしかは櫻白殿下馬廻り百騎ゝかをを
きゝへ此処へ御動座あつて城の動靜よくゝ
御覽あつゝこの城いゝゝゝ要害よく然ゝ奥山ゝ
たくきたつ一旦ゝ攻んとせは味かゝ多く損をへ
ゝ攻口をゆるへ遠巻ゝして計策をゝとゝへゝ
と下知したまひしかは引とゝ引とゝそき
軍を止めゝ工夫をゝらゝけゝ

北國勢平豊後守ゝ城を攻る事

并平豊後守戰死の事

北國勢の中ゝ長井右衛門大夫といふものなゝ是

ハ・上列三川山の永井豊前守の弟形ノ・兄豊前守ハ武田信玄の幕下ふく・上列先鋒衆のうち形ノ・去ろはふ・豊前守死ノてのち武田家滅亡ノそのゝち・上杉謙心ル・逃去あろうしかハ・北條氏政關東ふ跋扈ノいりまル〳〵その旗下ふ付々ハ処ふ・永井右衛大夫・一人北条ふ・去ろくゃくそ・そハうふ勢かハら・北條と・去ゝ〳〵合戰ノたろうしかとル・援の勢ルかけまハ・終ふ落城ノけふふよう・兄豊前守ハ・藤田能登守の取次ふく・景勝ふ仕へ・藤田ろ組下と形ノ・居ゝまそハか・今度の合戰・さいそい形ノ・如何ふルノて・永井を三川山へ・かへ〳〵いるへ〳〵と・出もひ・藤田ろ

計畧ふく・三川山の地下人へ・北條滅亡遠からノ去ろらは・舊主永井右衛大夫かへうきむへ〳〵其方とル・そやく・思案をめくらしハへと・申ハろそ〳〵去かハ・三川山の里人・よろこんそ・そふそ〳〵く・當時此邊ふ北條家の侍とてハ・平豊後守一人ふハ・いろふル〳〵て・この平を・御攻ふされハへかノ・豊後守を討ろうハそ〳〵・誰ふてル手さそ・そのハそと・答へけふふよう・藤田能登守・天正十八年三月廿五日申の刻・松枝をうちたち・八里の道をたゞ一息ふ・そ〳〵その夜・寅の刻ふ平の近邊ふそをつき・そ〳〵ふて・人馬の息を休め・地下人とルをかうもよふ〳〵・明ろせ

六日卯の刻ふ・平へ・ふ〜よせ・前後より・追とうまき
関をどのと・作ア・鉄炮を・打かけ・短兵急ふ・せめたて
けふゐどふ・豊後守肝をうば〜・いゃ〜ハ・きん・迫ル
我身一ゆの力ふ〜持ち〜えへきふ・あらとと思ひ
一子市郎丸を人質とゝて・降を乞けふゐどふ・藤田
是をゆろ〜・平の館をハ・破却ふ〜藤田ハ・三ゆ山へ
ひきハアヒ・永井を領主ふ・仕を召たろ・豊後守こゝ為
ふらハ藤田ふ・降参〜ゆとども・譜代の主てゐあう・
北條の恩ワとれゆ〜〜とて・鉢形の北條安房守氏
邦へ・事の始末を注進〜・ゃつ藤田ろ体を見ゆふ・勢
ハ・三千ふあまろ・四千ふ足ハとふぶえハ・まゝ永井

右衛門大夫ろ勢ハ・百餘騎とハ・見えハへとル・多く
ハ・三ゆ山の地下人ろう・事ふの様ゝゝ・えろ〜志き
をのゐハハ〜・いそき御勢をむけられハへ〜・様ゝ
ゃ〜・藤田ろ備ふ加ちろ〜ハ去様・さいさいあれ・程
よきゞふんふ・裏切仕るへ〜と・申をゝりけふ・北條
安房守氏邦元より思慮あさき大将あう〜ゃハ・豊
後守ろ・使ふむろひ・注進の条祝着せう・ゆらハ・四月
八日吉日なろ・七千餘騎ふゝ・させむゃふへ〜・その
手ハゃう〜ゃの手ハあふ〜と・委細ふ・言ふくめ
ゝ・ゃへ〜たろ・去ろゆふ・氏邦の近習ふ志津帯刀と
いふをのあろ・元ハ・藤田ろ侍ありけふろ・故あゝ

藤田ハ勘當せられ・氏邦ハ去くゝゃひ・居たりけふ
これを功ハ歸參せんやと・思ひふそゃハ・虚病して・
藤田ハ陣ハいくゝ・ハ・やくと・あらせたり・藤田この事
をきく・何条ぞるとや・あらんとく・更ハ・ぞうあハさ
ゝ・ゃハ・帯刀ハ・虎の尾をふゆ・ちして・鉢形へ
ゃへうけふ・跡ハく藤田甘糟備後守をまゑき・この
事いゝ・をへきと評定しけるハ・備後守去ゝ・案
して・申けふゝ・豊後守ハ關東ハきこえ・大力の勇
士ぞう容易ハ・うちゃゝ・いのをハゆ・たそゃうく・
これをきゆへ・切手ハ・神保五左衛門・夏目舎人助
二人たふへと申ゆ・藤田ゆ元より・ゃうハ思ひ

ーをゆとハ・その義ハ取きハめ・ゃいのひく・ハして・
ハゝ・たらは・後悔その甲斐あるまし・そゃく呼せ
たまへやと・評定一決し・座敷をぞつらひ・豊後守を
呼けとハ・豊後守あやしゃ何事のあるく・よぞゆく
ハや・我ハ降參の外きゆ・ぞの形ゝ・ゃうハ親し
いきゆへき身ハあらゆ・これハ・この頃鉢形へ申せ
しこの漏たるゆらんよしく・藤田いゝハそゃゆ
とゆ・ぞれゃし一人・やゝとハ・死をまきゆうと・
覺悟し・藤田ゝ役所へいくゝけう・藤田ゝ役所ハて
ハ・何事やらん・この邊のゃれめとゆ・八九人・あり
まゝく・扇をひらき手をたゝき唱ひ舞ひ・さゝゝ

しく見えたりけり いかれも十七八の眉目よく聲
うはりしきその柏子をとりくやおぐけあ中よ藤
田もいたく取ゝ〳〵しく舌もまたらぬ田舎ぶりぜん
とろ〳〵とろかる釜も湯のたぎはり〳〵やたぎはと
うゝふ処へ豊後守のとさしく出たまい藤田きつと
見て豊後守これへ出せといひあやら手を取て
座敷へとりあひ游君ともの中へ出しあかせい豊
後守もなのれたて そのをもいさく居たりける処
へ游女ともの前後よりとりやゝり盃をさゝむはゝ
とゝ豊後守もあゝ見まもり〳〵たちやへらんと
おく けしきを見て夏目舎人助服差をぬくより早

く豊後守ゝ真向めかけて切やゝはゝ豊後守ゝ
ちやきそのあとへ夏目みへ目もかけく二尺三寸
の大服さゝ藤田ゝ腰を一おきみとそらひきゝみ
きりたまへ藤田ちとさしきを引きのをそのとき
神保五左衛門豊後守ゝ神保ゝ
太刀のあゝさをくゝまゝ甘糟ゝきりやゝはゝを舎人
助たゝゝかけく豊後守ゝやゝさき二三寸きり込
たゝ豊後守手をおひしやゝとゝをおしゝ屈をく藤
田甘糟二人のうちをとおりひきりくまゝりゝはゝ
を五左衛門舎人助前後より引きたて いひゝ是
をうちとめたゝ藤田神保ゝ豊後守ゝ帯したる

關兼定の脇差をあさえ・夏目よゐ・豊後守ろ・乘をゝ
ア〜馬をあさえたろ・この馬ゐ豊後鹿毛とゝたけ
八寸ほあまろ〜・名馬形ろ
流布本ゐ神保ハ初太刀・夏目ハ・二太刀と・最初ほ
やくせ〜処・夏目ハ銚子ゐゝ豊後守ほちゃく神
保ハ・はかゐゝ・その座ゆを〜よろゝ・夏目初太
刀をうつ神保二太刀をうちたろ・これハ夏目の
をゝたふゐあらゝ・神保ろ後れたはゐもあらゝ
今二太刀の神保を以て・ちゝめゝ・初太刀ゐろ
夏目を二とゝはろうゝと・藤田ろいひ〜よ〜を注
をゝ・これハ夏目ろ記の説と同〜けゑとも・元よう
欺やうゝ豊後守をきらんとゝはゐれハ・便宜ほ
よろゝ詰〜ゐゐへ〜・はゑハ・兼ゝ初太刀・二太刀
の順序をゐせ〜ゐゐ・ゐゐへあらゝ・よろゝ本文
乃やゝよろ〜とを

重修真書太閤記十一編巻之十七終

重修真書太閤記十一編巻之十八

佐野口合戰の事

并松田尾張入道逆心の事

藤田能登守・信吉ゑ・平豊後守をうちもらしその後平ら居所へハ・竹股松本の両手ゑ・跡部甚内を相添さ〜せたらも〜・追手搦手より・十重廿重ゑ・とりまきそのうへゑ〜・跡部甚内真先ゑ・ち〜ミ・大音聲ゑ・平ら家臣等たしゃゑ・うけたまはれ・主の豊後守ニ心をゝ〜ぐ〜き・旧主の北條家へ内通しゐる趣・露顕したゆゑ・たちまちゑ・これを誅せらるゝ・其方共

主と同しく身をかしこまりてこの儘ゆ
よつて運を天に任せいへ。そもまさ主の不義ふ與
せしとおもひのそのあ心のまゝに立のそ申さへ
をうしも當手より出しかまひ申ましと呼たろし
かは平ろ家臣とも。いかにも厚かし我々いちやき
頃より身をよせしそのごとなつ何とて死をとル
ふきへきとて。ふしをかゝ立のきたつその中ま
平ろ一族ふや有そん。平主殿といふその。まさ同し
ゝとかふ侍三人。大手の門を出ひらき敷皮しき
くかしにまろ。寄手の御大将へ。何と申御方ふや我
等ろ寂期の申処を一通り御きゝへや我ゝ豊

後守へ北條五代の恩を受しそのふへい。北條と
共に死生存亡をおかしく仕るへきそのふへ。然は
ふ不時に御勢をさしむけられ。折ふし我等おとも
をろあい申さへよろ所おきまゝに御陣へ降参仕
さへとも。その本意いろふもして。故主の北條へ
かへろへんと。日夜朝暮いとを申さへけるふよ
ま間をうかゝひへを。志津帯刀と申そのかへろ忠
仕りへひしよろ。豊後守を御討かされへひしろ。
志津ろ出らせさへいら。定めく御陣中御騒き
へへしたゝし志津ろかへろ忠も。故主の恩を思ふ
ちく涙あへくして。新主のめくみをうけとふしよへ

はたゞハ豊後守が所行とても・不忠不義とハ申さば
まじくば・帯刀が北條どのに・やしなはれしかど・天
三年四年にも・およびしは・豊後守が御陣へ参りては
たゞわづか四五日の間にハ・北條どのハ・帯刀をうち
たりしはおやとおもへ・思召ばこそあれ・たゞいまに鼠の
ごとく・にげかくしたりしは・犬侍と我等がいひし言
ハ・同じからず・ほそとても・我等たく四人あらば・御勢に
むかひ・軍仕りしとも・運をひらく・へきにあらず・は
なとて・正しき主の豊後守が・からきめにあひしゆへ
なるかハ・一矢射て其のくち・腹きり豊後守と共に
死出三途を・ともへきなれども・いひもせてぬに　四

人一同に・まづさちありし・さつやのさげしき寄手も
おもひしに・二三十間ひきさがりぞく・欺かられけり・其
義なられ・ときさまあらく・こゝいふや・といへどのもあ
まずさハ道理ありて豊後守が所業ふくむへき・非
をといふものもなかりし・あちしためらふれども・四人
のそのハ・尋常に腹かきさりて・失けり・是をきゝば
人まさ・大におどろき・はさもし・豊後守ハ・よき侍
をもちたりし道理はなくしく・さくろも剛に・弓矢と
てその身のちからを・世に多かなりし侍はかなと
ころも是をおめのしてけり・上杉霜臺このことを聞
たまひ・平が一子市郎丸といふものを・よびいだし

その方父豊後守景勝ゑ對〳〵野心をくゝさてゝゑ
よろ組かしらの藤田うためゑうゝれたろ此ゑ共
我めこゝゝ涙さゝゝ故主へはくゝと真實心はらゑゑ
くむへさゑあらば北條も今ハめつぞうゝたゑハ
豊後守いろゑおのゑとゆせんかはへゝゝその方
ハ我ゑつうへゝ忠勤をゑげめよとハひ渡されゝ
や中二年あうゝ市郎左病死ゝたうけゑハ平ろ家
ハかゝく断絶さ

平豊後守ハ上刈蓑輪の城主内藤修理亮の組ゑ
ゝ平四十騎の分限ろう高山白倉ろゝ組合た
ゑゝその地ハ上野甘樂郡ろう

はくまゝゝ駿河の御勢ゑ北條と隣國の工てゝたう
且ろゝゝゝ縁者のあゝくろう一際目ゑたつ働き
して關白の御感ゑ有けるやとゑおめひしかハ
天正十八年四月朔日駿河のせんろう松平周防守
康重佐野口よろゝそくんて宮城野口ゑおゝ寄々ゑ
を小田原やゝゝの侍松田上田ろとをちゝめこくを
專途とふせきたくゝゝひゝゝやどゝ駿河勢短兵急ゑ
せめ付しかハ小田原勢うゝゝゝその八十餘騎ゑ
をよび散々ゑおろくゝふ小田原へふけさうたろ同ゝ
き二日久世三四郎坂部三十郎をゝのゝゝて箱
根ゑ出もむかしめゝその〳〵ち御陣を箱根ゑとくめ

たまひ葛籠さらふ於て戸田三郎右衛門忠政をめ
されし御こしよりせたまふ処の采配を賜はりて
その方この采配を以て後殿をちをへとそ仰付
らるさう忠政眉目をそどこ〳〵隨分こゝ功をはた〳〵
してもつまいりけふをいのちを〳〵武門の名
誉と羨みけり

久世三四郎廣宣は平四郎長宣の子永禄四年辛
酉の生れ形ち今年三十歳御入國の後上總横田
村三百石をたまふ坂部三十郎廣勝は又十郎正
宣の子三四郎と同年形ち共に大須賀五郎左衛
門尉康高の組御入國の後上總國横内村三百石

を賜ふ

かつ久世坂部ら不候を感しおそれしめされたる爰
ふ近江中納言秀次卿は駿河の御勢よりひきはら
ひ〳〵おしたまふへきさめ形ちけるふ何とそ主
ぶしそん駿河の御勢をかきわけ〳〵無体みかけ
たまひけふを御覽せらるしかくては駿河の御勢と
必定爭論起るへくおそれしかは御使をもつて
陣を〳〵のことゝ孫く殿下のさゝめたまふ処ふる
をむたいに破りたまふを主ふはへ〳〵次第を
守りて おしたまへと仰られしかとも中納言どの
おらきやくして無二無三におしたまへは果して

駿河勢の先手衆ならえん。をでは同士討さへく見えしゃハ。かさ孫ゑ村越茂助を御使ふて。駿河衆を制したまひ。ふゝゝひ中納言とのへ仰られるハ。御若氣をへ。たやうふ。をやらせたまふをあきと申ふハいゝゝねとゝ。この山道ハ。東國第一の切処ふゝかつゝ敵陣ちゃくゝゝ。あゝふ。御勢いさゝをさゝ見えゝ。過ちひきいさゝ。敵ふ利をはゝん。をゝはへのらゝ。よゝゝ。御思慮あふへくゝと仰ゝらをゝちもけふ。秀次卿御はのひの口狀たしゃふ承ゝらゝゝ。たゝし。御勢の先手衆。ゝのまふ。をゝどけ形く見えゝふよう。きれのゝの勢をはしゝへゝ。いゝを

ふゝ。此処ハ。秀次次第ふかしたまへくと。仰らをしゃハ。茂助まゃゝりがへゝくと言上ふをよハ。そのとき。駿河衆ハ。ゃ孫ゝの。御下知を守て山ふ添ゝ陣をとる。秀次衆へ。いよゝ。さてゝ。ちしけふ処へ。北條方の。福嶋伊賀入道。南條山城守以下古兵の剛のその。まぐてふまぐて三百余騎。山合の道をえちゝゝ。鉄炮をうちゃけ。炮のいまさたえさる間よう。鎗をいゝ。左右をたをけく杉さきゃくて。北條流の手柄を見せんと。案内まうたる。はまゝゝふ敵をゑらゝく。うちゝれハ。秀次卿の旗本まうたてらゝ。狼狽ゃきう形く見ぐふしき処へ。雀部淡路守

熊谷内蔵頭ともてしらふらに突ていく〻めつかへさんと。そさらく我〻〻言〻福嶋伊賀入道例の鉄の棒を打ふり〻〻やさそ〻〻よつ。うちひしき志ゃは。散々そへと深山おろしまに秋の木の葉のちへとく立足も形〻まくる立ら也。ひくもひろ也。をくしもやらに打をくめられ。如何いせんと懼怖也馬をたてたまへよ〻我。きこ〻めされ。左おわひいるおとよ。ちりとく援そて止へきち。井伊兵部少輔い居おそさくはやと仰よつ。こふ一やうふ赤ちはしぬつの具足をて。三四百騎真先ま。をくめい。松平周防守いたら貝の前立したふ塊ま黒いとの。よろひ黒き

馬ふ黒鞍をきこれしをとらぬ侍二三百騎前後左右まひきぐして。小田原勢のかちゑこつたる真中へ面もふらに。切〻やくはが。是をして。南條山城守敵ふあらての加そうたろ。志ろも駿河勢と太ゆはが形ろ。只今海道第一と名誉の大将軍形る我〻や爰い。引て味方の氣をやしかへき処形ろ。そやひけ〻と。そせまそろ〻。下知しけもい。や孫〻よ〻調練したる侍とし形ろ。我手足をはかふ如くこつかへそうかへ。引あけたろ。かくて〻秀次卿ル希有ふし〻道也たまひふろ。志ろしてのち。秀次卿よろ使を以て。餘ろ逆〻〻。死地ふ。いろいひしを。御勢ふよ

マ・引取れて・今まもつめぬ御恩まいと申上られけ
るを聞めし此方よりは・父世三四郎・を以て・いくさ
のおらひ・勝負の時の運ふよはそのふい・御勢の軍
ぶり・はらみあしきとい・見うけをい・この後御油断
おく御かせをいへと・仰ちるとはいへい・近江中
納言どの赤面して・ひちけうと・ひろう・小田原勢ハ
秀次卿の勢をやふろう・勝利を得て・味方の鋭氣を増
去々・さるをひとしも・それを為ふ・結句駿河の衆を
ちらしと・陣とらせけるい・竹ろ鼻・湯本・宮城野口
の軍勢とも・いのもと小田原へ・ひきたまつ・氏政
父子大ふ・おとろき・敵いろふ・たけく勇ましとも・山中

をい・たやをく破らもしと・おのひしふ・おそれも既ふ
落城ふをよふ・箱根の嶮岨ふてたそ・喰とむろから
んと・いのもしも決定して・心をやをめ居たろいる
そのをと・おいかもとも・今い詮かし福嶋・南條・畑割
石橋の邊ふ打出・是をまちむかへさ・一合戦仕りい
そんとまてめしを・松田尾張入道をくこいて・敵
い大勢ひんもろも・山中・箱根の軍ふかちて・氣力さ
かんひろふ・小勢ふくろいく・付入ふ・攻いらもてふ・
後悔をふこも・その甲斐あるへうらん・たて堅固ふ
籠城をへきあうと申けるを・運のはきぬるかかし
さい・氏政・この儀ふ同心し籠城ふこそ決しけれ

小田原城攻清水太郎左衛門尉勇戰の事
幷松田尾張入道内通の事

天正十八年四月三日・駿河の御勢小田原表ゑおし
よせたり・是より〳〵そて・上方勢いけとも〳〵我劣ら
ぬと・よせたりしかい・城の四方ハ野も山も軍勢お
おらぬ処おし・旗馬印い・風ゑおひき・鎗長刀い・時お
らぬ・秋のもゝそのゝ穂ゑ似たり・城中これをそて・あ
おをひたゝし・むの〳〵武田信玄・上杉謙信おとよを
きゝ申〳〵を有しかとも・我をとハ・けらゑやさおら〳〵
やくてゝ・籠城いゝ〳〵おるへきおんといひあつか
ふゝとゑ・海上ゑい・九鬼・村上・久留嶋おんと・船軍を

むゑとせし人々・兵船幾百餘艘といふ・ゑをゝ出ら
ゑ・漕おらへたり・この勢ふてい・當城を手ごゝ越
とゝやゝさゝらしおんと・こゝろ〳〵ふらゝゑへい・
いけとゝ〳〵退屈してそ・見えゝうけるゝ・けゝ処
ふ・關東ゑゝ軍ゑ名を得し・皆川山城守廣照おゝ・
やゝうして・百騎おかう・ひきぐして駿河の御陣
駈いう降參ゑゝ・ゑゝよう・關百殿下をゝ知よしあ
ゝゝれい・直ゑ關白殿下の陣へ參上ゑ・關白殿下山
城守をよひきゑいゝふ・皆川そのゝう事ハ關東の
名家おう・おふとゝ・北條如きゝ催促ゑおゝゝひけ
ゝ・ゝゝそらいゝしと・仰らゝしゝかい・山城守御下向

をまち付奉らんと。その間。城中へいりさいわう。然へ。城中の計義おのゝ心得いとゝ手配その不ら
あらまし言上ふをよゝ。關白きこしめされ。信玄謙
信をためしゝ秀吉をたゝかはせそ。おゝしけ也。件の
両人現在せは。北條よう先ゝ。まつ征伐あるへきゝ。
さゝやく死して仕合ちゝ也や此うへへ總軍一同ゝ。一
攻せめ〻見よやと。下知せら也しゝよう。諸手いり
れゝ仕寄をいけゝ。楯竹束をいきあらへ。同月九日
鯨波をはゝくゝ。鉄炮をさゝちかけ。これをせむる。中
ふゝ。駿河勢の中より。阿部左馬助正吉一陣ゝ。さゝく
ゝ。城方の柵をひきやゝう。こゝ入ゝふ処へ。城中よ

ゝ。鈴木大學助といゝ精兵の射手をきまかゝへの
名人あるゝふら。矢種おしまゝ。切てさかつ矢継へ
さゝやゝ。あさ也へかあらゝ。矢聲をかくふ其聲去て
しゝ。ふうやまゝ。阿部ら手のこの射ゝらまはゝ也。と
きゝかぬるを見さゝ。清水太郎左衛門尉と名乗
四尺余りの大太刀うちふゝ〻切かゝふ。左馬助
のかさまゝと。馳むかひ一交ゝせゝ。たゝかひ〻ふ
ら。左馬助ら鎗清水ら脇ゝあゝふを。事とりせゝ。阿
部ら肩先ふかゝきら付しゝ。ゝどゝ。阿部馬より落る
を。清水おゝ〻。飛をら首をとらんと。ちらいく処
へ。阿部ら郎等戸澤善右衛門。鎗を以て。清水ゝ向ふ

清水戸澤ろ鎗をきろ。一太刀打て馬よのろ。猶
もとゝむを大導寺孫九郎・荒川豊後守・大森甲斐守
以下十騎そろう清水をたゝけてかけいりぬ。阿
部ろ手のもの。ゝゝれたるを井伊兵部少輔ろ手よ
り木股右京菴原主税・岡本半助おとうゝふのゝく
如くそうゝ。ゝゝ。これよりぐひく。松平周防守の手
のもの。おゝゝく。掛合たろ。市ゝとも。清水・荒川・大森
大導寺いりぬも。相應よりきくびとろく。ひきたろ
そゝ城門を固めて。鉄炮をきひゝくうち出したゝ
い。寄手さんゝよ打かやまゝたろ。氏政清水を尊
く賞きろぬ。そろ十人よも同ゝく。太刀黄金を賜き

りて。軍功をもけまゝたよ。
清水太郎左衛門尉ハ伊豆國韮山城ふ。こもりた
るふ。流布本ゝゝよ重出して。勇戰の始末を。去る
ひ。いりぬろ我の是かろ城ゝろひ。去ゝらく流布
本よゝゝかいりくゝゝよ掲出し。其疑ひを存し以
く後の訂正をまつ
時よ松田尾張入道心中ふゝろよゝらひ。おゝひ
腹心の郎等川上作之丞といふものを呼いゝして。
ひそかよ。堀秀政の手へ。ゝゝかゝらゝ去りは。堀川上を
よひいぬ。何事そとゝゝよ。一大事よひへい。殿下へ
ちきよ申上へゝと申よよろ。我のよゝを關白殿下

ふ言上しけるは關白おもへとく〻めされたり作の丞御前ふ平伏して北條譜代の侍松田尾張入道言上ありける意趣は主ふくは截流軒左京大夫二人ともふ朝憲を忽緒し殿下の約條を背むきはて入道たひ〻いさめはへとも更ふめちひ申さはや〻はてふ及ひはやくてふ當家めつぶう遠やりはおぼえは たび〻背むかし先祖早雲氏綱氏康ふうけは恩をおもひはふ今の主ふやへく件の三人の跡目断絶はりまのらさはやうふとあそ念願仕はかれこの条たしかふ御背るしをかふむりはを涯分の忠をはく〻申へきふくはと言上はは關白殿

下きこしめされふくき松田り申条やかとはおそしめされはとふ大事のまへの小事ぶろたかやうきく城責の手だてをちらくやとうちひりをたまひ川上はく〻あんて承そふ入道おどの不覺人まさあるへきやうる申うくはをを十分ふ申上て御為ふかるへきををはりふ申上はは背れふくかふふ御ちからひの有へきやと例の大音聲ふて仰らふ〻はは御陣中ふひゑきこうくふそろしけふ川上をこ〻さ〻こよろ入道申めけくはは一大事ふはは御側の人々をを〻御のけくはをはへと申はは關白殿下御座をたくをらふ川上り傍ふむぎと

座らせたまひ、作之丞ゟ両腕をとうたまひ、耳さ〜
ゟけて、さや申せと仰らはれハ、作之丞聲をひそめ
て、云々と言上ハ、其の時關白殿下いろゝ御心得
あり、事成就せハ、入道ゟ申さん処相違あるへからス、
と、仰らるゝ、よ〜、まかりゃへりて、入道ゟ申せ、不忠
をのめと、仰せらるゝ、作之丞を、たきとゝ召れ、御袖の
内より、黄金錢ゟ〜ゟ〜、とりいだ〜たまひ、賜れ賜
ゟかそと仰られ、そのまゝ奥へ入たまへハ、川上出
そるゝ〜ふるひ〜ふるひ〜、きて、城中へゃへり入たり、其
のち殿下堀秀政一人をめ〜具せらるゝ、川上ゟ申を
〜路をのぞうたまふ、妙福寺地藏堂あと、さとぞた

まへハ、石垣山ゟ、木の間より、見たまふ、小田原
の城ハ、眼下ふ〜ゟ〜ゟ、何さゝ〜ゟ、御本陣をう
ひさ〜れおハ、城中ふ〜恐怖さへ〜、早々此処へ御陣
を移さるへ〜と、ひそゃゝ人夫を集めて、木を伐
柴をゃらをたまひふ〜ゟ、
北條五代記ゟ、石垣山の作事四月朔日ゟ、ちー
め、一夜の中ふ出來し、紙ふくゃべをゟ〜と云、
三日小田原を圍むと、ゝ、家忠日記ハ、八日の後
のと〜、湯本の真覺寺より移るとゝ、

重修眞書太閤記十一編卷之十八終